『太平広記』訳注

――巻四百二十一「龍」四（下）――

太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』訳注　―巻四百二十一「龍」四（上）―」（『国語国文学研究』第四十九号　二〇一四年）に続き、『太平広記』の巻四百二十一後半三話の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

なおこのたび本研究会はめでたく十周年を迎えることができた。小規模な集まりながらこれだけの長い年月継続できたことは、ひとえに会員諸氏の努力の賜物である。感謝の意を述べたい。加えて、その成果を発表する場を与えて下さった熊本大学文学部国語国文学会にも厚く御礼申し上げる。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』訳注　―巻四百十八「龍」一（上）―」（『国語国文学研究』第四十三号　二〇〇八年）及び「『太平広記』訳注　―巻四百二十「龍」三（下）―」（『国語国文学研究』第四十八号　二〇一三年）に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

○30「韋氏」

〔本文〕

京兆韋氏、名家女也。適武昌孟氏。唐大曆末、孟與妻弟韋生同選。韋生授揚子縣尉、孟授閬州録事參軍。分路之官、韋氏從夫入蜀、路不通車輿。韋氏乘馬、從夫至駱谷口中、忽然馬驚、墜於岸下數百丈。視之杳黑、人無入路。孟生悲號、一家慟哭、無如之何。遂設祭服喪捨去。

韋氏至下、墜約數丈枯葉之上、體無所損。初似悶絶、少頃而甦。經一日、饑甚。遂取木葉裹雪而食。傍視有一巖罅、不知深

淺。仰視墜（墜字原闕。據明鈔本補。）處、如大井焉。分當死矣。

忽於巖谷中、見光一點如燈。後更漸大。乃有二焉。漸近、是龍目也。韋懼甚、負石壁而立。此龍漸出、可長五六丈。至穴邊、騰孔而出。頃又見雙眼。復是一龍欲出。韋氏自度必死、寧爲龍所害。候龍將出、遂抱龍跨之。龍亦不顧、直躍穴外。遂騰于空、韋氏不敢下顧、任龍所之。如半日許、意疑已過萬里。試開眼下視、此龍漸低、又見江海及草木、其去（去字原闕。據明鈔本補。）地度四五丈。恐負入江、遂放身自墜、落於深草之上。

良久乃甦。韋氏不食、已經三四日矣。氣力漸憊、徐徐而行。遇一漁翁、驚非其人。韋氏問、「此何所。」漁翁曰、「此揚子縣。」韋氏私喜、曰、「去縣幾里。」翁曰、「二十里。」韋氏具述其由、兼饑渴。漁翁傷異之。舟中有茶粥、飲食之。韋氏問曰、「此縣韋少府上未到。（明鈔本無到字。）」翁曰、「不知到未。」韋氏曰、「某即韋少府之妹也。倘爲載去、至縣當厚相報。」漁翁與載至縣門。

韋少府已上數日矣。韋氏至門、遣報孟家十三姉。韋生不信、曰、「十三姉隨孟郎入蜀。那忽來此。」韋氏令具説此由。韋生雖驚、亦未深信。出見之、其姉號哭、話其迤厄。顏色瘁瘁、殆不可言。乃舍之將息、尋亦平復。韋生終有所疑。後數日、蜀中凶問果至。韋生意乃豁然、方更悲喜。追酬漁父二十千、遣人送姉入蜀。孟氏悲喜無極。

後數十年、韋氏表弟裴綱、貞元中、猶爲洪州高安尉、自説其事。（出『原化記』）

〔訓読〕

京兆の韋氏は、名家の女なり。武昌の孟氏に適ぐ。唐の大暦末、孟と妻の弟の韋生と同に選せらる。韋生は揚子県尉を授けられ、孟は閬州録事参軍を授けらる。路を分ちて官に之き、韋氏 夫に従ひて蜀に入るに、路 車輿を通ぜず。韋氏 馬に乗り、夫に従ひて駱谷口中に至るに、忽然として馬驚き、岸下に墜つること数百丈。之を視るも杳として黒く、人 入る路無し。孟生 悲号し、一家慟哭するも、之を如何ともする無し。遂に祭を設け喪に服して捨て去る。

韋氏 下に至り、約ね数丈の枯葉の上に墜ち、体に損なふ所無し。初め悶絶するに似たるも、少頃にして甦る。一日を経、饑うること甚だし。遂に木葉を取りて雪を裹みて食らふ。一巖 罅有るを傍視するも、深浅を知らず。仰ぎて墜ちし処を視れば、大井の如し。分として当に死すべしと。

忽ち巖谷中に於いて、光一点の灯の如きを見る。後更に漸く大なり。乃ち二有り。漸く近づけば、是 竜目なり。韋 懼るること甚だしく、石壁を負ひて立つ。此の竜 漸く出づるに、長五六丈可。穴辺に至り、孔より騰がりて出づ。頃くして又た双眼を見る。復た是 一竜出でんと欲す。韋氏 自ら度る 必ず死せんよりは、寧ろ竜の害する所と為らんと。竜の将に出でんとするを候ち、遂に竜を抱きて之に跨る。竜も亦た顧みず、直ちに穴外に躍る。遂に空に騰がり、韋氏 敢へて下顧せず、竜

の之く所に任す。半日許の如くして、意に已に万里を過ぎたるかと疑ふ。試みに眼を開きて下視すれば、此の竜 漸く低く、又た江海及び草木を見るに、其の地を去ること四五丈ならんと度る。負ひて江に入らんことを恐れ、遂に身を放ちて自ら墜ち、深草の上に落つ。

良や久しくして乃ち甦る。韋氏 食らはざること、已に三四日を経たり。気力 漸く憊れ、徐徐として行く。一漁翁に遇ふに、其の人に非ざるかと驚く。韋氏問ふ、「此 何れの所なるか」と。漁翁曰く、「此 揚子県なり」と。韋氏 私かに喜び、曰く、「県を去ること幾里なるか」と。翁曰く、「二十里なり」と。韋氏 具に其の由を述べ、兼ねて饑渇せりと。漁翁 之を傷み異とす。舟中に茶粥有り、之に飲食せしむ。韋氏 問ひて曰く、「此の県の韋少府 上れりや未だ到ざりしや」と。翁曰く、「到れりや未だしやを知らず」と。韋氏曰く、「某は即ち韋少府の妹なり。倘し為に載せ去きて、県に至れば当に厚く相報ゆべし」と。漁翁 与に載せて県の門に至る。

韋少府 已に上りて数日。韋氏 門に至り、遣りて孟家の十三姉と報ぜしむ。韋生 信ぜずして、曰く、「十三姉は孟郎に随ひて蜀に入る。那ぞ忽ち此に来たるか」と。韋氏 具に此の由を説かしむ。韋生 驚くと雖も、亦た未だ深くは信ぜず。出でて之を見れば、其の姉 号哭し、其の迍厄を話す。顔色の瘁瘁せしこと、殆ど言ふべからず。乃ち之を舎して将息せしむれば、尋いで亦た平復す。韋生 終に疑ふ所有り。後数日、蜀中より凶問 果して至る。韋生 意 乃ち豁然として、方めて更に悲喜す。漁父に追酬すること二十千、人を遣りて姉を送りて蜀に入らしむ。孟氏 悲喜すること極まり無し。

後数十年、韋氏の表弟裴綱、貞元中、猶ほ洪州高安の尉為りて、自ら其の事を説く。

〔語注〕

○**京兆** 京兆尹の略。長安を行政区画の上で三分割した内、現在の西安市以東の地を指し、この地の行政長官も同名で呼ばれる。他に長陵以北の左馮翊、渭城以西の右扶風と併せて三輔と称される。○**韋氏** 京兆の韋氏は『元和姓纂』巻二「韋」では帝顓頊の後裔とされており、名家として知られていた。『梁書』巻十二「韋叡伝」に「韋叡字懐文、京兆杜陵人也。自漢丞相賢以後、世爲三輔著姓。」（韋叡 字は懐文、京兆杜陵の人なり。漢の丞相賢より以後、世よ三輔の著姓為り。）とある。○**武昌** 現在の湖北省鄂州市付近。○**孟氏** 『元和姓纂』巻九「孟」に拠れば、孟姓は魯の桓公の庶子である公子慶父の子孫とも衛の襄公の長子孟縶の子孫とも言われ、孟軻（孟子）も同族とされる。武昌の孟氏には二十四孝に数えられる呉の孟宗や、東晋末の孟嘉・孟顗兄弟がいるという。○**揚子縣** 現在の江蘇省揚州市附近に在った県名。○**尉** 県に設置された官職で、主に軍事・刑罰を司る。○**閬州** 現在の四川省南充市閬中市一帯。○**録事參軍** 州の佐官の名で、役人達の勤務記録を調べ、善悪を判断することを司る。○**駱谷口** 谷の名で、「儻谷」とも言う。

現在の陝西省周至県の南西に位置し、秦嶺山脈を通り抜けて蜀の方面に通ずる儻駱道の長安側の入り口である。儻駱道は褒斜道や子午道などと同じく所謂「蜀道」の一つであり、李白「蜀道難」（『李太白文集』巻三）に詠われる如く、大変険しく危険なことで知られる。『元和郡県図志』巻二十二「山南道」に「按駱谷在長安西南。南口曰儻谷、北口曰駱谷。谷中多反鼻蛇、青攢蛇、一名燋尾蛇。常登竹木上、能十數歩攢人。人中此蛇者、即須斷肌去毒。不然立死。」（按ずるに駱谷は長安の西南に在り。南口を儻谷と曰ひ、北口を駱谷と曰ふ。谷中に反鼻蛇、青攢蛇、一名燋尾蛇多し。常に竹木の上に登り、能く十数歩より人に攢す。人の此の蛇に中る者は、即ち須らく肌を断ちて毒を去るべし。然らずんば立ちどころに死す。）とある。○**罅**　裂け目、隙間。○**少府**　県尉の別称。県令を明府と称し、県尉はそれに次ぐから少府という。○**上**　任地に赴き任官すること。○**妹**　韋氏は韋少府の姉であるが、ここで何故「妹」と名乗るのか分からない。各本異同はない。燕山訳は「妹妹」、河北・天津訳は「姐姐」と訳している。○**蜀**　広く現在の四川省一帯を指す。○**迤厄**　「屯厄」に同じ。難儀。○**痿瘁**　生気が無く萎びていること。○**將息**　養生する。将は養、息は生の意。○**凶問**　死去の知らせ。凶報。○**豁然**　疑いや迷いがぱっと解ける様。○**表弟**　父方の姉妹の子で、自分より年少である者。○**裴綱**　未詳。両『唐書』には見えず、この話以外では未見。○**貞元**　唐徳宗の年号。七八五～八〇四。この事件は大暦（七六六～七七九）末のことなので、およそ十～二十年後のことになる。○**洪州高安尉**　洪州は現在の江西省北西部一帯、高安は現在の江西省高安市に在った県名。尉は唐代の官名。県ごとに置かれ、司法・軍事・警察などの役人を監督する。○『**原化記**』　晩唐・皇甫氏撰。皇甫氏は名は伝わらず、洞庭子と号した。既に散佚しており、『太平広記』を中心に六十数条の佚文が残されている。

〔訳文〕

京兆の韋氏は、名家の娘である。武昌の孟氏に嫁いだ。唐の大暦年間（七六六～七七九）の末、韋氏の夫の孟と弟の韋生はともに科挙に及第した。韋生は揚子県の尉を授けられ、孟は閩州録事参軍を授けられた。別々の道を通って赴任する際、韋氏は夫に従って蜀に入ったが、その道は車や輿が通れなかった。韋氏は馬に乗って夫に従い、駱谷口を通っている時に突然馬が驚いて、数百丈（一丈＝約三・一一m）の崖下に落ちてしまった。のぞき込んで見ても底知れず真っ暗で、下りていく道もなかった。孟は悲しみ叫び、一家みな慟哭したがどうしようもなく、葬儀を行って喪に服し、そのまま捨て置いて出発した。

韋氏は崖下に着地した時、数丈ほど積もった枯葉の上に墜ちたので、怪我は無かった。最初はもだえ苦しんだが、暫くすると正気を取り戻した。一日経ってひどい空腹を覚えたので、木の葉を取って雪を包んで食べた。岩の裂け目があるのが眼に入ったが、どれほど深いのか分からなかった。足を踏み外した

所を仰ぎ見ると、井戸のように見えた。韋氏はきっと死ぬ運命に違いないと思った。

突然、谷の中に灯火のような光の点が一つ見えた。点は徐々に大きくなってきて、なんと二つになった。ゆっくり近づいてみると、これは竜の目であった。韋氏は大層恐れて、岩壁に背を付けた。この竜が徐々に出てくると、長さは五、六丈くらいあった。穴の縁まで来ると、飛び上がって出ていった。しばらくするとまた両眼が見えた。また竜が一匹出て行こうとしているのである。韋氏はこのまま、きっと死んでしまうくらいならば、竜に殺された方がましだと考えた。そこで竜が出て行こうとするのを待ちかまえ、そのまま竜に抱きついて跨った。竜は振り向きもせず、真っ直ぐ穴の外に躍り出た。そのまま空に昇ったが、韋氏は恐くて下を見ることもできず、竜の行くに任せた。半日ほど経って、もう一万里（一里＝約五五九．八m）も過ぎたかと思った。試みに眼を開けて下を見てみると、この竜は段々高度を下げており、川や海、草木を見たところでは、地面から四、五丈くらいかと目測した。韋氏は竜が自分を背負ったまま川に入るのではないかと恐れ、そのまま竜から離れて飛び降り、深く茂った草の上に落ちた。

しばらくして韋氏はやっと目を覚ましたが、もう三、四日何も食事をしていなかった。気力も徐々に尽きつつあったので、とぼとぼと歩き始めた。すると老漁師に出くわしたが、まるで人間ではないかのように驚かれた。韋氏が「ここはどこですか。」と尋ねると、老漁師は「ここは揚子県だ。」と答えた。韋氏は内心喜び、「県の役所まで何里ありますか。」と言うと、老漁師は「二十里だ。」と答えた。韋氏は詳しく訳を話し、加えて飢えと渇きを訴えた。老漁師は哀れに思い、舟の中に茶と粥が有ったので、韋氏に食べさせた。韋氏が「この県の韋少府様はもう着任なされましたか。」と尋ねると、老人は「お着きになったかどうかは分からん。」と答えた。韋氏は「私は韋少府様の妹です。もし私を車に乗せて県の役所までお連れ下されば、きっと厚く御礼いたしましょう。」と言った。老漁師は彼女を乗せて県の役所の門に到着した。

韋少府はすでに着任して数日が経っていた。韋氏は門の所に行って、人をやって孟家の十三番目の姉が来たと報告させた。韋少府は信じず、「十三番目の姉上は孟殿について蜀に入られたはずだ。どうして突然ここにおいでになったりするものか。」と言った。韋氏は詳しく理由を伝えさせた。韋少府は驚いたが、すっかり信じたわけではなかった。出て会ってみれば、姉は号泣し、災難について語った。容貌の衰え具合は言い表せないほどであった。そこで彼女に宿を取って休ませると、ほどなく恢復した。しかし韋少府はまだ疑いの気持ちを捨てきれないでいた。数日後、果して蜀から姉の凶報が届いた。韋少府はやっと疑いの気持ちが晴れて、一層喜んだ。老漁師には銭二万を与え、人を遣って姉を蜀に送らせた。孟氏はこの上なく喜んだ。

数十年後、韋氏の従兄弟の裴綱は、貞元年間（七八五～八〇

五）でもなお洪州高安の県尉であったが、自らこのことを話していた。

○31「任頊」

〔本文〕

唐建中初、有樂安任頊者。好讀書、不喜塵俗事。居深山中、有終焉之志。嘗一日、閉關晝坐、有一翁叩門來謁。衣黄衣、貌甚秀、曳杖而至。頊延坐與語。

既久、頊訝其言訥而色沮、甚有不樂事。因問翁曰、「何爲而色沮乎。豈非有憂耶。不然、是家有疾而翁念之深耶。」老人曰、「果如是。吾憂俟子一問固久矣。且我非人、乃龍也。西去一里有大湫。吾家之數百歳。今爲一人所苦、禍且將及。非子不能脱我死、輒來奉訴。子今幸問我、故得而言也。」頊曰、「某塵中人耳。獨知有詩書禮樂、他術則某不能曉。然何以脱翁之禍乎。」老人曰、「但授我語。非藉他術、獨勞數十言而已。」頊曰、「願受教。」翁曰、「後二日、願子爲我晨至湫上。當亭午之際、有一道士西來者。此所謂禍我者也。道士當竭我湫中水、且屠我。子伺其湫水竭、宜厲聲呼曰『天有命、殺黄龍者死。』言畢、湫當滿。道士必又爲術、子因又呼之。如是者三、我得完其生矣。必重報。幸無他爲慮。」頊諾之。已而祈謝甚懇、久之方法。

後二日、頊遂往山西、果有大湫。即坐於湫旁以伺之。至當午、忽有片雲、自西冉冉而降於湫上、有一道士自雲中下。頎然而長、約丈餘。立湫之岸、於袖中出墨符數道投湫中。頃之、湫水盡涸、見一黄龍、帖然俯於沙。頊即厲聲呼、「天有命、殺黄龍者死。」言訖、湫水盡溢。道士怒、即於袖中、出丹字數符投之、湫水又竭。即震聲呼、如前詞、其水再溢。道士怒甚。凡食頃、乃出朱符十餘道、向空擲之、盡化爲赤雲、入湫、湫水即竭。呼之如前詞、湫水又溢。道士顧謂頊曰、「吾一十年始得此龍爲食、奈何子儒士也、奚救此異類耶。」怒責數言而去。頊亦還山中。

是夕、夢前時老人來謝曰、「賴得君子救我。不然、幾死道士手。深誠所感、千萬何言。今奉一珠。可於湫岸訪之。用表我心重報也。」頊往尋之、果得一粒徑寸珠、於湫岸草中。光耀洞澈、殆不可識。頊後特至廣陵市。有胡人見之曰、「此眞驪龍之寶也。而世人莫可得。」以數千萬爲價而市之。（出『宣室志』）

〔訓読〕

唐の建中の初め、楽安の任頊（じんぎょく）なる者有り。好みて書を読み、塵俗の事を喜ばず。深山中に居り、終焉の志有り。嘗て一日、関を閉ざして昼坐するに、一翁有りて門を叩きて来謁す。黄衣を衣（き）、貌甚だ秀で、杖を曳きて至る。頊延坐して与に語る。

既に久しくして、頊其の言訥（とつ）にして色沮（そ）なるより、甚だ楽しからざる事有るかと訝（いぶか）る。因りて翁に問ひて曰く、「何為れぞ色沮なるか。豈に憂ひ有るに非ずや。然らずんば、是家に疾有りて翁之を念ふこと深きか」と。老人曰く、「果して是の如し。吾が憂ひは子の一問を俟（ま）つこと固（もと）より久し。且つ我は人に非ず、乃ち竜なり。西のかた去ること一里に大湫有り。吾之に家すること数百歳。今一人の苦しむる所と為り、禍

且将に及ばんとす。子に非ずんば我が死を脱する能はず、輒ち来りて訴へ奉る。子 今 幸にして我に問ふ、故に得て言ふなり」と。頊曰く、「某は塵中の人なるのみ。独だ詩書礼楽有るを知るのみにして、他術は則ち某 暁る能はず。然して何を以て翁の禍を脱するか」と。老人曰く、「但だ我が語を授けん。他術に藉るに非ず、独だ数十言を労するのみ」と。頊曰く、「願はくは教へを受けん」と。翁曰く、「後二日、願はくは子 我が為に晨に湫上に至れ。亭午の際に当たり、一道士の西より来たる者有り。此 所謂 我に禍する者なり。道士 当に我が湫中の水を竭くし、且つ我を屠らんとすべし。子 其の湫水の竭くるを伺ひ、宜しく声を厲しくして呼びて『天に命有り、黄竜を殺す者は死せん』と曰ふべし。言ひ畢はらば、湫 当に満つべし。道士 必ず又た術を為すも、子 因りて又た之を呼べ。是の如き者三たびならば、我 其の生を全くするを得ん。必ず重く報ぜん。幸はくは他に慮を為す無かれ」と。頊 之を諾す。已にして祈謝すること甚だ懇ろ、之を久しくして方めて去る。

後二日、頊 遂に山西に往くに、果して大湫有り。即ち湫の旁に坐して以て之を伺ふ。当午に至り、忽ち片雲有り、西より冉冉として湫上に降り、一道士の雲中より下る有り。頎然として長く、約ね丈余。湫の岸に立ち、袖中より墨符数道を出だして湫中に投ず。之を頃くして、湫水 尽く涸れ、一黄竜の、帖然として沙に俯するを見る。頊 即ち声を厲しくして呼ぶ、「天に命有り、黄竜を殺す者は死せん」と。言ひ訖はれば、湫水 尽く溢る。道士 怒り、即ち袖中より、丹字数符を出だして之を投ずれば、湫水 又た竭く。即ち声を震はせて呼ぶこと、前詞の如くすれば、其の水 再び溢る。道士 怒ること甚だし。凡そ食頃にして、乃ち朱符十余道を出だし、空に向かひて之を擲てば、尽く化して赤雲と為りて、湫に入り、湫水 即ち竭く。之に呼ぶこと前詞の如くすれば、湫水 又た溢る。道士 顧みて頊に謂ひて曰く、「吾 一十年にして始めて此の竜を得て食と為さんとするに、奈何ぞ子は儒士なるに、奚ぞ此の異類を救ふや」と。怒り責むること数言にして去る。頊も亦た山中に還る。

是の夕、夢に前時の老人 来り謝して曰く、「君子の我を救ふに頼り得たり。然らずんば、幾ど道士の手に死せしならん。深誠の感ずる所、千万もて何ぞ言はん。今 一珠を奉る。湫岸に於いて之を訪ぬべし。用て我が心の重報を表すなり」と。頊 往きて之を尋ぬれば、果して一粒の径寸の珠を、湫岸の草中に得たり。光耀洞澈、殆ど識るべからず。頊 後 特り広陵の市に至る。胡人有りて之を見て曰く、「此 真に驪竜の宝なり。而して世人得べきは莫し」と。数千万を以て価と為して之を市ふ。

〔語注〕

○**樂安**　現在の浙江省台州市仙居県。○**任頊**　未詳。両『唐書』には見えず、この話以外では未見。○**終焉之志**　その地で天寿を全うしたいと考えること。『晋書』巻八十「王羲之伝」に「羲之雅好服食養性、不樂在京師。初渡浙江、便有終焉之志。」（羲之 雅より服食養性を好み、京師に在るを楽しまず。初め浙江

を渡り、便ち終焉の志有り。）とある。○訥　いいなやむ。言葉がすらすら出ない。○沮　失意のさま、失望したさま。○湫池。水たまり。○亭午・當牛　正午。○頎然　高く聳える様。また、立派な容貌。○道　文章などを数える量詞。○帖然　地に身を伏せる様子を言うか。「帖」を地に伏せる意に用いる例としては、『呉越春秋』巻八「勾践帰国外伝」に「猛獣將撃、必餌毛帖伏。鷙鳥將搏、必卑飛戢翼。聖人將動、必順辭和衆。」（猛獣　将に撃たんとせば、必ず毛を餌して帖伏す。鷙鳥　将に搏たんとせば、必ず卑く飛びて翼を戢む。聖人　将に動かんとせば、必ず辞を順にして衆に和す。）とある。○廣陵　揚州の古名。現在の江蘇省揚州市一帯。唐代には揚州都督府が置かれて水陸交通の中心を占めたため、北方向け江南物資の大集散地となり、また揚子江河口に近いため、外国貿易港として空前の発展を遂げた。○胡人　西域からやって来た人。西域からやって来た商人が一見ありふれた物の価値を見抜き、それを高値で買い取るという一群の話、所謂「胡人買宝譚」については、石田幹之助「西域の商胡、重価を以て寶物を求むる話　―唐代支那に広布せる一種の説話に就いて―」「再び胡人採寶譚に就いて」「胡人採寶譚補遺」（『長安の春』東洋文庫　平凡社　一九六七年）、富永一登『中国古小説の展開』第五章第三節「商胡買宝譚」（研文出版　二〇一三年）等に詳しい。○驪龍　黒竜。驪竜の顎の下にある珠は千金の価値があるという。『荘子』「列禦寇」篇に「夫千金之珠、必在九重之淵、而驪龍頷下。」（夫れ千金の珠は、必ず九重の淵、驪竜の頷下に在り。）とあり、成玄英疏に「驪、黒龍也。頷下有千金之珠也。」（驪は、黒竜なり。頷下に千金の珠有るなり。）とある。○『宣室志』晩唐・張読（八三四～八六六）が編纂した小説集。既に散佚しており、現在見ることができるのは、明代の輯本（十巻・補遺一巻）のみである。この話は補遺に収められている。

〔訳文〕

唐の建中年間（七八〇～七八三）の初め、楽安の任頊という者がいた。学問を好み、俗世のことを喜ばなかった。山中深くに居を構え、そこで一生を終えたいと願っていた。ある日、扉を閉ざして昼間に座っていると、一人の老翁が扉を叩いて面会を求めてきた。老翁は黄色の衣を身につけ、ただ者ではない容貌で、杖をついていた。頊は老翁を招き入れて語らった。

しばらくすると、頊は老翁が何か言いにくそうで、気落ちした様子なので、良くないことがあったのかといぶかしく思った。そこで老翁に「どうしてそんなに気落ちしておいでなのですか。何か心配事でもおありなのでしょうか。そうでなければ、御宅にご病気の方が居られて深く心配なされているのでしょうか。」と訊ねた。老翁は「確かにその通りです。私の心配事についてあなたがお尋ね下さることをずっと待っておりました。しかも私は人間ではなく、竜なのです。ここから西に一里（約五五九.八m）のところに大きな池があります。私はそこに数百年住み着いております。しかし今ある者に苦しめられ、禍いの及ぶと

ころとなろうとしております。あなたでなければ私を死から救うことはできませんので、お願い申し上げに参ったのです。幸いにもあなたの方から私にお尋ね下さいましたので、申し上げることができました。」と言った。頊は「私は俗世の人間に過ぎません。詩書礼楽といった儒家の学問を知っているだけで、他のことは全く分かりません。どうやったら御老人の禍いを取り除くことができるのでしょうか。」と言った。老翁「私の呪文をお教え致します。他に特別な術を使わずとも、たった数十語お手数をおかけするだけです。」頊「どうかお教え下さい。」老翁「二日後の朝、どうか私のために池の畔においで下さい。正午、西から一人の道士がやって来ます。これが私に禍いをもたらす者です。その道士は私が住む池の水を枯らし、その上私を殺そうとします。あなたは池の水が枯れそうになったら、大きな声で『天には定められた運命がある、黄竜を殺す者は死ぬ。』と叫んで下されば結構です。言い終わったら池の水はまた一杯になるはずです。道士はきっとまた術を使うでしょうが、そうしたらあなたはまた呪文を叫んで下さい。これを三度繰り返せば、私は殺されずに生を全うすることができます。きっと厚く御礼申し上げます。どうか他のことはお考えなさいませんように。」頊は引き受けた。老翁は長いこと厚く礼を述べてから帰っていた。

二日後、頊は山の西に行って見ると、確かに大きな池があった。そこで池の側に座って待っていると、正午に小さな雲が西からやって来て湫の畔に降り、中から道士が出てきた。背が高く立派な容貌で、一丈（約三．一一m）余りあった。道士は池の岸辺に立ち、袖の中から墨で書いた呪符数枚を取り出して池に投げ込んだ。しばらくすると池の水は枯れ尽くし、黄竜がばったりと砂の上に伏せっていた。頊はすぐに大声で「天には定められた運命がある、黄竜を殺す者は死ぬ。」と叫んだ。言い終わると、池の水はまた一杯になった。道士が怒って、すぐに袖の中から丹で書いた呪符数枚を取り出して投げつけると、池の水はまた枯れた。しかし頊がすぐに前と同じ呪文を叫ぶと、池の水はまた一杯になった。道士は大層怒った。しばらくすると、今度は朱で書いた呪符十数枚を取り出し、空に向かって放り投げると、皆赤雲と化して池に入って行き、池の水はすぐに枯れた。しかし頊が前と同じ呪文を叫ぶと、池の水はまた一杯になった。道士は頊の方を振り返って、「私は十年かかってやっとこの竜を食べようというのに、どうしてお前は儒者でありながらこの異類などを助けるのだ。」と言い、頊に二言三言怒鳴りつけて去って行った。頊も山中に帰っていった。

その晩、先の老翁が夢に出てきて、「君子たるあなた様が私をお助け下さいました。さもなくば道士の手にかかって殺されていたでしょう。この深い感謝の念は、どれほどの言葉でも言い尽くせません。今、珠一つ差し上げたく思います。池の岸でお探し下さい。それによって私の心からの感謝の気持ちを表します。」と礼を言った。頊が行って探してみると、確かに直径

一寸（約三・一一㎝）程の珠を池の岸辺の叢の中で見つけた。光り輝く様は、殆ど見たことがないようなものであった。頊は後に一人で広陵の市場に出かけた。胡人がこの珠を見て、「これは真に驪竜の宝で、世俗の人間には手に入れられないものです。」と言い、数千万で買い上げた。

○32「趙斉嵩」

〔本文〕

貞元十二年、趙齊嵩選授成都縣尉。收拾行李兼及僕從、負箚以行、欲以赴任。然棧道甚險而狹、常以馬鞭拂小樹枝。遂被鞭梢繳樹、猝不可脱、馬又不住、遂墜馬。枝柔葉軟、不能碍輓。直至谷底、而無所損。視上直千余仞、旁無他路。分死而已。所從僕輩無計、遂聞於官而歸。

趙子進退無路、墜之翌日、忽聞雷聲殷殷、乃知天欲雨。須臾、石窟中雲氣相旋而出、俄而隨雲有巨赤斑蛇。鼇合拱、鱗甲煥然。擺頭而雙角出、蜿身而四足生。奮迅鬐鬣、搖動首尾。乃知龍也。趙生自念曰、「我住亦死、乘龍出亦死。寧出而死。」攀龍尾而附其身。龍乘雲直上、不知幾千仞。趙盡死而攀之。既而至中天、施體而行。趙生方得跨之、「必死於泉矣。」南視見雲水一色。乃南海也。生又歎曰、「今日不葬於山、卒於泉矣。」而龍將到海、飛行漸低。去海一二百歩、捨龍而投諸地。海岸素有蘆葦、雖墮而靡有所損。

半日、乃行路逢人。問之、曰、「清遠縣也。」然至於縣、且無伴從憑據。人不之信、不得繾綣。迤邐以至長安、月餘日、達舍。家内始作三七齋、僧徒大集。忽見趙生至、皆驚恐奔曰、「魂來歸。」趙生當門而坐、妻孥輩亦恐其有復生。云、「請於日行、看有影否。」趙生怒其家人之詐恐、不肯於日行。疎親曰、「若不肯日中行、必是鬼也。」見趙生言、猶云、「乃鬼語耳。」良久、自敍其事、方大喜。

行於危險、乘騎者可以爲戒也。（原闕出處。明鈔本作出『博異志』）

〔訓読〕

貞元十二年、趙斉嵩 選せられて成都県尉を授けらる。行李を収拾して兼ねて僕従に及び、箚を負ひて以て行き、以て任に赴かんと欲す。然れども棧道 甚だ険しくして狭く、常に馬鞭を以て小樹枝を払ふ。遂に鞭梢の樹に繳ふを被り、猝かに脱すべからざるも、馬 又た住まらず、遂に馬より墜つ。枝 柔らかく 葉 軟らかく、碍輓する能はず。直ちに谷底に至るも、損なふ所無し。上を視れば直ちに千余仞にして、旁に他路無し。分として死するのみと。従ふ所の僕輩は計無く、遂に官に聞して帰る。

趙子 進退 路無く、之に墜つるの翌日、忽ち雷声の殷殷たるを聞き、乃ち天の雨らんと欲するを知る。須臾にして、石窟中より雲気 相旋いで出で、俄かにして雲に随ひて巨赤斑蛇有り。鼇ほ合拱にして、鱗甲煥然たり。頭を擺るへば双角出で、身を蜿すれば四足生ず。鬐鬣を奮迅し、首尾を揺動す。乃ち竜

なるを知るなり。趙生 自ら念ひて曰く、「我 住まるも亦た死せん、竜に乗りて出づるも亦た死せん。寧ろ出でて死せん」と。竜の尾に攀ぢて其の身に附く。竜 雲に乗りて直ちに上り、幾千仞なるかを知らず。趙 死を尽くして之に攀づ。既にして中天に至り、体を施して行く。趙生 方めて之に跨るを得、「必ず泉に死せん」と。南視するに雲水一色なるを見る。乃ち南海なり。生 又た歎じて曰く、「今日 山に葬られず、泉に卒するか」と。而るに竜 将に海に到らんとし、飛行すること漸く低し。海を去ること一二百歩、竜を捨てて地に投ず。海岸に素より芦葦有り、堕つと雖も損なふ所有る靡し。

半日にして、乃ち路を行きて人に逢ふ。之に問ふに、曰く、「清遠県なり」と。然して県に至るも、且く伴従の憑拠する無し。人 之を信ぜず、繾綣せらるるを得ず。迤邐して以て長安に至らんとし、月余日にして、舎に達す。家内 始めて三七斎を作し、僧徒 大いに集まる。忽ち趙生の至るを見、皆 驚恐して奔りて曰く、「魂 来たり帰へる」と。趙生 門に当りて坐し、妻孥の輩も亦た其の復生有るを恐る。云ふ、「日に於いて行かんことを請ふ、影有りや否やを看ん」と。趙生 其の家人の詐恐するを怒り、肯へて日に於いて行かず。疎親曰く、「若し肯へて日中に行かずんば、必ず是 鬼なり」と。趙生の言ふを見るも、猶ほ云ふ、「乃ち鬼の語なるのみ」と。良や久しくして、自ら其の事を叙ぶれば、方めて大いに喜ぶ。

危険を行くに、騎に乗る者 以て戒と為すべきなり。

〔語注〕

○**趙齊嵩**　未詳。両『唐書』には見えず、この話以外では未見。○**成都縣**　現在の四川省成都市一帯。○**尉**　県に設置された官職で、主に軍事・刑罰を司る。○**箚**　もうしぶみ。臣下が君主に差し出す上奏文。○**棧道**　山中の険しい崖などに木を掛け渡して造った道。長安から蜀の方面に赴く場合、多く所謂「蜀道」の棧道を通る。30「韋氏」の語注「駱谷口」を参照。○**繳**　まつわる。からまる。○**碍輓**　しっかりと掴み止める。○**合拱**　両腕で抱える程の大きさ。動植物の体が大きいことを形容する。○**蜿**　蛇などのうねり行く様。○**盡死**　命がけで行う。「效死」に同じ。○**施**　旗が揺らぐさま。ここではそのように竜が身をくねらせることを言うか。○**泉**　ここでは海のことを言うか。○**諸**　…に。「於」「乎」に通ず。○**清遠縣**　現在の広東省清遠市。○**憑據**　たよる。よりどころ。○**繾綣**　情の厚いさま。○**迤邐**　ぶらぶら歩くこと。○**三七齋**　人の死後二十一日目に仏事を修めること。『冥祥記』第百六話に「孝建二年一日、自言死期、謂道産曰、明夕吾當於君家過世。…四更之後、乃稱疲而臥、顔色稍變、有頃而盡。闔境爲設三七齋、起塔。塔今猶存。」（孝建二年一日、自ら死期を言ひ、道産に謂ひて曰く、「明夕吾 当に君が家に於いて世を過ぐべし」と。…四更の後、乃ち疲と称して臥し、顔色 稍や変じ、有頃にして尽く。闔境 為に三七斎を設け、塔を起こす。塔 今猶ほ存す。）とある。○**妻孥**　妻と子。○**疎親**　疎遠な者と親近な者。○**若不肯日中行、必是**

鬼也　日中でも影が無いというのは、神仙などの超自然的な存在の特徴として見られる。例えば『列仙伝』巻下「玄俗」には「王家老舎人自言、父世見俗、俗形無影。王乃呼俗日中看、實無影。」（王家の老舎人 自ら言ふ、「父の世 俗を見るに、俗の形に影無し」と。王 乃ち俗を呼びて日中に看れば、実に影無し。）とある。○『博異志』　晩唐・鄭還古が編纂した小説集。鄭還古は谷神子と号した。現行本は一巻で十話しか収められていないが、『太平広記』には三十数話が収められている。この話は中華書局点校本の補編に見える。

〔訳文〕

貞元十二年（七九六）、趙斉嵩は科挙に及第して成都県の尉を授けられた。荷物と召使いを引き連れ、書類を背負って出発して任地に赴かんとした。しかし桟道は道が険しくて狭く、ずっと馬の鞭で小枝を払っていた。しかし鞭の先が木に巻き付いて簡単には抜けなくなってしまったのに、馬が足を止めなかったので、斉嵩はそのまま馬から墜ちてしまった。（手が届くところの）枝も葉も柔らかかったので、掴んで落下を食い止めることはできなかった。谷底に真っ逆さまに落ちてしまったが、怪我は無かった。上を見れば千余仞（一仞＝約二一七．七㎝）の高さで、近くに道は無かった。斉嵩はきっと死ぬ運命に違いないと思った。斉嵩の従者達はどうしようもなく、そのまま事故を役所に報告して帰って行った。

斉嵩は行くも戻るもできなくなったが、谷底に落ちた日の翌日、突然ごろごろと雷鳴が鳴り響くのを聞き、雨が降りそうであることを知った。暫くすると、洞窟の中から雲気が次々と湧いてきたのだが、突然雲に随って巨大な赤い斑の蛇が現れた。大体一抱えもあり、鱗がきらきら輝いていた。頭を振ると二本の角が出てきて、体をくねらせると四本の足が生えた。たてがみを振るわせ、首と尾を揺り動かしていた。なんと竜であることが分かった。斉嵩は「ここに留まっても死、竜に乗って出て行っても死。ならば外に出て死んだ方がましだ。」と考え、竜の尾によじ登ってその体にしがみついた。竜は雲に乗って真っすぐに昇り、何千仞行ったか分からなくなった。斉嵩は命がけでよじ登った。天の中程まで達すると、竜は体をくねらせて進み始めた。そこで斉嵩はやっと跨ることができたが、「きっと海で死ぬことになるだろう。」と思った。南の方を眺めてみると、一面雲と水ばかりだった。何と南海である。斉嵩はまた「今日山に葬られず、海で死ぬことになるのか。」と嘆いた。しかし竜は海に到着しようという頃、段々低く飛び始めた。水面から一、二百歩（一歩＝約一．五五五ｍ）というところで、斉嵩は竜を離れて地面に飛び降りた。海岸にはもともと葦が生い茂っており、落ちたとは言っても怪我はなかった。

半日経って、やっと道を行って人に出会った。尋ねてみれば、「ここは清遠県です。」とのことだった。そして県の役所まで行ったが、証人となるような従者を連れていなかったので、人々に信用してもらえず、もてなしてもらえなかった。徒歩で

長安まで戻ることにして、一ヶ月程かかって家にたどり着いた。家ではちょうど三七斎を行っており、僧侶が沢山集まっていた。突然斉嵩がやって来たのを見て、みな驚き恐れて「魂が帰ってきたぞ。」と逃げ出した。斉嵩が門の所に座り込むと、妻子も斉嵩が蘇ったのかと恐れた。そして「太陽の下を歩いてくださいませ、影が有るかどうかを拝見したいのです。」と言った。斉嵩は家族が偽りだと思って恐れているのを怒り、太陽の下を歩こうとはしなかった。疎遠な者も親しい者もそろって「もし日向を歩こうとしないのであれば、きっと幽霊に違いない。」と言った。斉嵩が話しているのを見ても、まだ「幽霊の言葉だ。」と言っていた。しばらくして、斉嵩が事の次第を話すと、家族はやっと大いに喜んだ。

危険な所を行く場合、馬に乗る者にはこの話が教訓となろう。

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎○屋敷　信晴　　項　青　　○福本　睦美

田上　希　　西田　則子　　山下　宣彦

顧　雯

（○は編集担当者、◎は編集責任者）